

「子供たちの未来づくり」⑩

秋田の学校のヒミツ（その2）



「ザ・チーム」という本がある。

私たちは、アメリカは個人主義の国、日本は集団主義の国、とずっと教えられてきたと思う。この本の著者は、今の日本は、アメリカ以上に個人主義の国になっているという。アメリカは個人主義であると同時に「チーム」の国だと説くのである。

「チーム」は「グループ（集団）」とは違う。同質な人たちが集まっただけのもはグループであり、異質な人たちが集まって、それぞれの強みを活かし、助け合いながら、目標に向かっていくのが、「チーム」なのだという。

いろんな国の移民が集まっているアメリカほどチームの大切さを身にしみてわかつている国はない。だからアメリカでは、チームの中でどうしたら力を発揮できるかを、教育の基本としている。

それに比べ日本では、子供の時は試験の点数競争、大人になれば個人評価競争と、息つく暇なく個人競争がつづく。教育においても、進学のための試験勉強という自分個人のことばかりで、子供たちはチーム意識を養成する教育を受けていない、と指摘する。

「チームの本質は互いに助け合うこと」と「チームは失敗を許容する」……といった言葉を読んでいる内に、「あ、

そうだ！

これは、秋田の学校で見た先生たちのチームや、映画「みんなの学校」での仲のいい先生たちの姿のことを指しているに違いないと思った。

ひるがえって、我が宮崎県の学校現場はどうだろうか。秋田で見た、二人の先生が一緒にあって教えるチームティーチングは、宮崎県ではあまり行われていない。クラスを分けて、少数教室にして一人の先生で教えるケースが多いと聞いた。一つの教室の中で他の先生との共同作業というのは、先生方にとっては受け容れにくいのだろう。

しかし、秋田では、そういう経験を積み重ねていく中で、真の意味での「チーム」が形成されている。そういった挑戦によって、学校が、「グループ」から「チーム」へと、変革していけるに違いない。

「学校よ変われ！」「学校よ変わってほしい！」と心から切に願う。未来を担う子供たちのために。

文／日向市キャリア教育支援センター長

水永 正憲

